

「家がいいね」 第40号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2007. 9. 14

この先もあなたの「夢」の中に生きてまつせ

9月2日、河合隼雄先生の追悼式に京都へ行きました。

本と講演の交流しなくても我が師として認識し押しかけ出席しましたが、2千人の参列者には同じ気持ちか、普段着の人も多く認められました。



追憶の言葉も肩書きなし、音楽葬・献花・偲び草として文庫本贈呈など、家族と発起人の間で考え抜かれた先生の遺志に基づく追悼式でした。「善は微に入り細にわたって行わなければ」と。これは著書「こころの処方箋」の中にもある言葉です。

実像のあの人は小さい



この善き葬儀は、参列の人の実像も写し出しました。家族以外は全て名前を呼び上げず個人として献花し、式場を後にする人達がちょうど私の目の前を通ります。列の間にあの人の顔を初めて直に見ました。老いた小さな人としか思えませんでした。あの人を巨大に見せたものは「権力」でしょうかありません。「身内製造の世論」に誘導する新聞やテレビを含めたこの日本の「権力の構図」が、善を尽くして等身大を守ったこの追悼式で見えたと思うのです。

ベッドに合わせて足を切る話

介護のために、過度に高いベッドの足を切ったという話ではない。これはギリシャ神話。盗賊が旅人を捕まえ寝かした鉄のベッドより大きければ足を切り、ベッドより小さければ引き伸ばし殺すというお話。盗賊だから相手の命など知ったものではない。ベッドに合わせるといふこだわりがあるのみだ。一貫した見通しも無く、予算があれば大盤振る舞い、少ないから自己負担増をする医療行政は、盗賊に等しいと思う。私達はお金が無いからという「経済盗賊」の論理で考える必要はない。限りある命を生きてゆくための次元に話を戻さなければと思う。しかし盗賊は、「4月から高齢者医療は原則2割、足を切るぞ」と脅している。

「生きて虜囚の辱めを受けず」とは？

戦後62年を過ぎ、高齢の兵士達が語る戦争の番組を見ました。法律でもない軍隊の戦陣訓が、民間人に自決を強要する根拠になったと知りました。「介護を受けるぐらいいなら、早く死んだほうがいい」との言葉を聞きます。「尊厳死を早く法制化」との運動も聞きます。この国では美辞麗句でまた死に急がされないよう、生き抜く意味をお互いに噛みしめる地道な取り組みを必要としています。

「終わりよければすべてよし」自主上映会

みえ生と死を考える市民の会 主催

10月6日(土) 10時、13時の2回

15時半より「おしゃべり会」もあります。

三重県総合文化センター 小ホールにて

前売り700円 当日千円

この題を、「家族や社会のために頑張ってきた人達を、その最期でも大切にしない社会は、ど「かおかしい」と私は読み替えます。病院で死ぬのが当然のようになった社会。代償に過剰な医療が最期まで施され、その医療の中止も他人の意思にゆだねられる。法律や制度を問う以前に、私達の「生きる意味」を、この映画の監督(羽田澄子さん)はぜひ個々に考えて、と言っているのです。地域のお互いの生活の中で、最期までこの家で本当に暮らすためにどうしたらいいのか、伊勢地区でも自主上映を企画します。ご協力下さい。



若い医師の在宅医療の研修について

伊勢総合病院の研修医の先生が、訪問に同行します。今月までですが御協力をよろしくお願い申し上げます。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805

三重県伊勢市御園町高向 927

電話 0596-20-8104

ファクス 0596-20-8105

mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp

<http://www.tcp-ip.or.jp/~takuro>